

『忘れられないしょっぱかったカニの思い出』

現職時代の3月、卒業式を終えた翌日の夕方、N男の母親から茹でたズワイガニが担任の元に届いた。「お世話になりました」ひとこと添え、N男とともに学校に持参した。私にも是非食べてほしいと担任が素裾分けをしてくれた。

早速家に帰っていただいたが、そのしょっぱかったことしょっぱかったこと。でも、N男の成長を思い出すとともに、辛かったが楽しくもあった彼との3年間を振り返り、わたしたちのやってきたことが母親に届いたことを思い味わって食べた。

N男は小学生時代から先生方にはなかなか手ごわい相手だった。小学校との引継ぎでは中学校での指導の困難さを予測させるに十分な内容だった。

入学してからも指導がなかなか効果を得ず、幾度と繰り返される事件に、先生方は指導の手詰まり感を覚えた。担任は毎日のように家庭訪問し出来事を報告。しかし、母親は息子に何もしてやれない自分を責めるばかりだった。

当の本人は人懐っこく、挨拶の上手にできる生徒だった。町の人にも元気よく挨拶ができるそんな生徒だった。また、休み時間に支援学級に寄っては一緒に遊んでやる優しい面があり、支援学級の生徒にとっては、学校の中で相手をしてもらえる数少ない生徒だった。

ところが一度気に入らないことがあると直ぐキレ、周りが見えなくなることも多かった。オレの天下だといわんばかりに、自分を主張。同級生に対しては勿論のこと上級生に対して、先生方に対してもおっかないものは何もない生徒であった。そのため、周囲からは腫れ物に触るかのように見てみぬ振りをされてきた節がある。

事を起こしては担任と校長室に謝罪に訪れた。担任がいつも心配していることを忘れるなと言、私は必ず添えた。

忘れることのできないN男に関わる事件が発生した。N男はサッカー部に所属、練習を熱心に行ける生徒でもあった。ある時のこと、N男が狭いグラウンドから蹴ったボールが、背丈の低いフェンスを越え、側を通りかかった車のワイパーを破損させた。年配の運転手が血相を変えて校長室に談判にやってきたのだ。

学校は何を指導しているのか、車の部品を破損させたのに謝罪もしない生徒がいるとは何という学校かと。同時にそのことについて校長はどう考えるのかと私に釈明と謝罪を求めた。

本当に生徒が謝罪しなかったのかどうかをその方に確認した。それを聞いた校長が悪いとさらに憤慨し、謝罪はなかったと言い切った。うちの生徒が失礼なことをして謝罪しないはずはない。先生方の指導を信じたい。N男本人に謝罪したかどうか確認させるので、時間をほしいとお願いした。

当然先方の怒りはピーク状態だが、私もこの学校建て直しに体を張って頑張っている先生方の指導を思うと、はいそうですかすみませんでしたというわけにはいかなかった。

本人確認では小さい声だが謝罪はしたとのこと、相手は渋々それを受け入れた。私は、ワイパーを壊したことについては謝罪したが、N男が謝罪しなかったことについては認めることはしなかった。N男が謝罪したかどうかの自信は私にはなかったが、先生方のやってきたことは信じてやりたかったというのがその時の気持ちだ。

先生方は対応を心配し、校長室の様子を固唾を呑んで見守っていたという。何せ、学校が少し落ち着きを見せようかという折に外部からの直談判を受けたのだから。

私にすれば常々、日常の当たり前を実践する先生方を評価してきたつもりだが、「先生方の指導を信用する」と対応した校長の言葉を、職員は重く受け止めた。また、N男は「校長に助けられた」とその後の先生方の厳しい指導に耳を傾ける姿が目につくようになった。N男が変わり、学校が変わった。

卒業式当日、途中から目を真っ赤にし、涙を何度も拭うN男の姿があった。N男の母さんはその姿をしっかりと見届けてくれたに違いない。

N男と過ごした3年間は、苦しくもあったが私たちは組織で生徒指導することの大切さを学び、彼への指導を通し職員の結束をより強固なものにしていくことができた。もう一つ学んだのは、何でも謝れば済むっちゃうもんではないということ、しょっぱかったカニの思い出である。